

看護実践研究指導センターの

看護学教育の自律的な改善を目指す継続的質改善（CQI）モデル開発と活用推進プロジェクトが紹介されました。

① 世界に通用する人材育成をめざして「大学教育のイノベーション日本（HEIJ）」p12~13

Center for Education and Research in Nursing Practice, Graduate School of Nursing, Chiba University

千葉大学 大学院 看護学研究科附属看護実践研究指導センター

〒260-8672 千葉県千葉市中央区玄倉 1-8-1 TEL：043-226-2377, 2378 FAX：043-226-2382（事務部）
E-mail：nursing-practice@office.chiba-u.jp URL：www.n.chiba-u.jp/center/

看護学教育研究共同利用拠点 社会が期待する看護の価値の創造に向けて、実践-教育-研究をつなぎ、全国の看護系大学および地域の関連施設の機能の充実・発展を目指す。

「千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター」とは

当センターは、1982年4月、看護系大学の教員等、看護学分野の調査研究に従事する者の全国共同利用施設として設置され、看護学教育の質向上に向けて、調査研究や専門的研修を実施してきました。

2010年度に「看護学教育研究共同利用拠点（拠点）」として認定され、2015年4月1日から再認定を受け、第2期の活動を開始しました。看護師等の人材確保の促進に関する法律（1992年）の制定後、看護系大学が急増し、教員の量的・質的確保や看護学固有の実習の質保証等の課題解決がもたらされています。また、社会環境の変化にともない、看護人材への役割期待、卒業時の達成目標が変化しつつあります。当センターは拠点として35年間の看護系大学および大学病院等との連携実績を基盤に、こうした看護学分野固有の教育の質保証に関する課題に取り組んでいます。活動に際して大切にしていることは、看護学の発展、社会的要請に応える看護職の輩出、および看護の価値の創造に向けて「教育・研究・実践をつなぐ」ことです。

拠点としての事業の狙い・特色

第1期の成果と課題をもとに、2016年度から「看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement:CQI）モデルの開発と活用推進」（2019年度まで）に取り組んでいます。この事業の狙いは、各看護系大学が、自律的に教育の質を保証できるように支援すること、そのための手がかりとしてCQIモデルを開発し、各大学からの要請に応じて個別支援を行い、大学間の相互支援体制を構築することです。

当拠点は、看護系大学におけるFD（Faculty Development）支援に加え、各看護系大学の実習機関等における実践・教育環境の改善に資するSD（Staff Development）支援も実施し、看護学教育の質保証を目指す点に特色があります。

事業の内容

各大学向けのCQI支援とともに、FD・SD支援として看護学教育ワークショップ、研修事業、外部の研究者と行う共同研究をすすめています。また、全国の看護系大学に共通する課題にも取り組み、文部

	2010	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19
教育一研究一実践をつなぐ 継続的改善型看護教育支援プログラムの開発										
看護学教育におけるFDワークショップの開発と 大学間連携推進の促進										
看護学教育の 継続的改善型モデルの開発と 活用推進										

図1 拠点として取り組んだ主な事業



図2 CQIモデルの開発と活用推進の狙い・取り組み

科学省2015～2017年度医療人養成受託事業として、「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の検証」を行いました。各事業をもとに多面的にとらえた看護学教育の状況、およびCQIに関する課題解決の知見を共有し連携を推進しています。

1. CQI支援：各大学の要請に応じて、個別コンサルテーション、FDマゼンマップ活用支援、FDコンテンツ開発支援を行っています。

2. FD支援
・看護学教育ワークショップ

対象：学部長、学部長、教務委員長、FD委員長等のCQIの推進者
目的：自大学のCQIの課題や課題解決の手がかりを得る

・看護系大学FD企画者研修（2017年度から開始）
対象：看護系大学におけるFD企画者 原則として1大学2名1組、5組（10名）程度。
目的：組織分析をもとに自大学の状況に即して系統的なFDを企画・実施・評価する能力を習得

3. SD支援
・国公立大学病院副看護部長研修 定員：20名

対象：大学病院の上級看護管理者
目的：社会的要請に即した医療の充実に向けて、組織変革を計画・実施・評価する能力を獲得する

・看護管理者研修（ベーシックコース）定員：100名
対象：急性期病棟の看護管理者（看護師長相当）
目的：医療提供体制の変化に即した看護職の役割遂行に向けて組織的課題解決する能力を研究する

・看護学教育指導者研修（ベーシックコース）
定員：50名
対象：看護学生を直接指導する臨床実習施設の看護職
目的：看護系大学と連携して社会の変化に即した看護学教育を行うための知識・スキルを学ぶ

4. 共同研究のテーマ例
・教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える看護学教育向けFDコンテンツ開発と評価

・FDコンテンツ開発（国際）10年後を見据えたグローバル人材育成と国際交流推進
・合理的配慮を要する学生の臨床実習に向けたFDプログラムの開発ほか

事業の活用状況

表1 センター利用看護系大学数（2010～2019年度）（単位：校）

施設形態	FD研修実施回数	FD研修参加者数	FD研修レポート提出数
国立（看護系大学）	38	1 (1)	7
公立	41	5 (1)	7
私立	107	18 (4)	21
計	186	24 (6)	35



2017年度看護学教育ワークショップ全体討議の様子
前年約70校、全大の約30%が参加しています。

事業の主な実績

- ・FDマゼンマップver.2 日本語版、英語版、中国語版
- ・FDマゼンマップ・FD支援データベース：FDマゼンマップデータベース、FDコンテンツデータベース、FD実績表データベース <http://fd.np-portal.com/>
- ・組織変革型看護職育成支援データベース（国公立大学病院副看護部長研修報告書） <http://www.np-portal.com/report/years/>

刊行物

- ・看護実践研究指導センター年報（昭和57年度～）
- ・看護学教育ワークショップ報告書（平成19年度～）
- ・千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターパンフレット（平成22年度～）
- ・ニュースレター（平成23年度～）

組織体制

センター長、2研究部の教員、特任教員を中心に、センター運営委員会（学内のみ）、センター運営協議会（学外委員含む）で他分野の教育研究者・学外の看護学教育実践者とともに事業計画等を審議しています。（平成29年度主要活動メンバー：センター長 古本宗子教授；コア開発研究部 野地有子教授、黒田久美子准教授；政策・教育開発研究部 和住子教授、鎌瀬忍准教授；吉田澄恵特任准教授）

世界に通用する人材育成をめざして



大学教育イノベーション日本
Higher Education Innovation in Japan

寄稿

CQIモデルの開発で 看護学教育の自律的改善を支援する

吉本 照子¹⁾, 吉田 澄恵²⁾, 和住 淑子¹⁾, 黒田 久美子¹⁾, 野地 有子¹⁾, 銭 淑君¹⁾

1) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
2) 東京医療保健大学千葉看護学部、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター(以下、当センター)は、「看護学教育研究共同利用拠点」として、「教育—研究—実践をつなぐ組織変革型看護教育支援プログラムの開発」(2010~14年度)、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」(2011~15年度)に取り組み、2016年度から「看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement: CQI)モデル開発と活用推進」(~2019年度)に取り組んでいる。本稿ではCQIモデル開発の狙いと内容、および期待される効果と課題について述べる。

大学の多様な特性を踏まえた CQIモデルの開発を推進

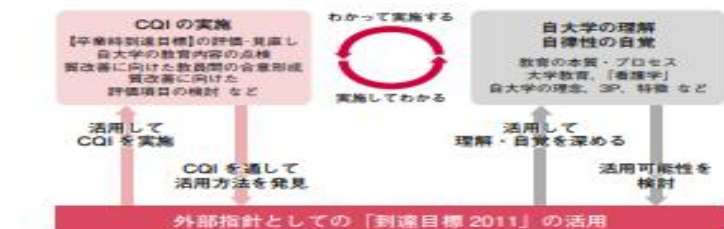
CQIモデル開発と活用推進の大きな狙いは、各大学の自律的な教育の質改善を支援する点にある。

看護系大学(以下、大学)は1997年以降、各年5~16校増加し260校を超えた(2018年4月)。急増に伴い教員の流動性が高くなり、教育経験の少ない教員が多様な背景を持つ教員の増加、あるいは世代交代などにより多くの大学が教育組織の再構築を迫られ、看護学教育のCQIは喫緊の課題となっている。

社会に目を向けると、80歳以上の高齢者が今後急増し、要介護者の増加、ケアサービス利用者の医療ニーズの多様化・複合化および増大が予測される。ケアニーズの変化に即し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支えるためには、看護職の量的確保のみならず、多様な専門性、ケアマネジメント力、専門職連携スキル、セルフマネジメント力などがこれまで以上に求められる。したがって看護基礎教育課程では、自律的な生涯学習者の基盤となる一定の看護実践力および自己教育力を習得する必要がある。看護学教育機関と保健医療福祉機関の連携による継続的な生涯学習支援が重要となる。

各大学において組織的な合意形成の困難も予測される中、当センターは大学の状況に応じた取り組みの手掛かりとなるようなCQIモデル開発と、活用推進に取り組むこととした。

CQIモデルでは、各大学の多様な特性を前提に、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー(3P)の策定や見直し、



●図 看護系大学における「到達目標2011」の活用の実態(文献3より改変)

教員の採用、ファカルティ・ディベロップメント(FD)の企画・実施・評価、地域連携、教育の質評価システムなどをどのように考え、実施するかを活動例とともに示したいと考え開発に当たっている。

そこで、大学の教育におけるCQIの実態解明、CQIモデルの開発と活用推進を段階的に進めている。大学の多様な状況に即して活用できるように、当センターの事業による研修や各大学へのFD個別支援などを通じ、各大学の状況を把握しながら開発している。

全国調査から導かれた CQI実践の実態と課題

各大学の管理責任者およびCQI推進者に対するCQIの実態に関する全国調査(2017年実施)では、CQI活動として、教育の改善に焦点を当てたFD研修、在学生に対する個別の授業評価、実習機関・施設等へのヒアリングなどは90%以上実施されていることが明らかになった。一方で、卒業生によるカリキュラム・授業・教育環境等の評価(42.2%)、卒業生の就職機関・施設等へのヒアリングや協議(62.7%)は相対的に少なかった。自己教育力を高める教育は51.8%が実施しており、大学種別および開設年との関連がみられた。

今後改善したいこととして、教員の適度な業務量やFD・CQI活動のための時間の確保など【人員・予算確保・業務量調整、組織づくり】、領域を超えた学生支援、各教員の教育観・看護観を相互理解し合う場の設定など【教員間の相互理解、CQIのための意識改革】、多様な評価をCQIに活用するための

見直しなどの【大学評価の見直し】が挙げられた。

各大学の管理責任者および科目責任者を対象とした、卒業時到達目標の活用の実態とその関連要因に関する全国調査(2016年実施)では、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」(文科省2011年、以下、「到達目標2011」)はカリキュラムの検討やカリキュラム全体の教育内容の網羅性を確認することに多く活用されていた。一方、学生へのガイダンス、卒業時の学生の自己評価や教員による評価には比較的活用されていなかった。

外部指針である「到達目標2011」の活用は、大学ごとに自大学の特性や状況を理解し、教育のCQIの一環である卒業時到達目標の評価の点で機能していた(図)。CQIにおいて外部指針を活用する方法を教員間で共有できるように、報告書とともにパンフレットを作成した。

CQI推進に向けた工夫点は

大学の組織的なCQIを推進する看護教員(原則として准教授以上)を対象に、2017年度看護学教育ワークショップ「看護学教育の自律的・継続的質改善(CQI)の戦略を練る」を当センターが主催し、104大学(全看護系大学の39.2%)、153人が参加した。うち65大学(24.5%)、67人がグループワークと全体討議に参加し、そこから、CQIの戦略を練る上で重要なこととして、看護職の成長は長期的観点から評価する必要があることが明らかとなった。加えて、CQI推進者の役割は各教員の先見性のあるアイデアを引き出しながら組織的取り組みにし、また

学生の成長や教員としての成長を実感できるように地域の関係者と協働することなどが導かれた。

外部指針と外部評価の活用で 効果的な質改善を

CQIに活用可能な外部指針として、「到達目標2011」の他、看護学教育モデル・コア・カリキュラム(文科省2017年)、また、外部評価として、各種大学ランキングがあり、日本看護学教育評価機構(仮称)による評価も始まる。これらの外部指針・外部評価の活用により、教員おのおのの考え方を尊重し合い、効果的・効率的にCQIに取り組むことができると考える。

地域の保健医療福祉機関は、多様な特性の学生を実習に受け入れ、その後卒業生を採用している。大学がCQIに向けて保健医療福祉機関と意図的・多面的に連携することにより、地域の看護職の一貫した生涯学習支援が実現でき、看護の質向上に貢献できると考える。

当センターでは、FD企画者研修、臨床実習指導者研修、各大学へのFD個別支援など共同利用拠点の利用推進を図ることで、教員間の連携を促す体制とコミュニケーションの活性化による着実な組織的発展と、学生への教育効果を実感している多くの事例を把握した。今後の課題は、こうした事例を集約してCQIモデルに反映し、有用性と実用可能性のあるCQIモデルとすることである。

●参考文献

- 1) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、文科省特別経費(プロジェクト分)看護学教育の継続的質改善(CQI: Continuous Quality Improvement)モデル開発と活用推進プロジェクト、大学における看護学教育の継続的質改善(CQI)活動と背景要因に関する研究報告書、2017. https://www.n.chiba-u.jp/center/statio/pdf/proj/ecs/project_report_2017_1212.pdf
- 2) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、平成28年度文科省受託事業、看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発(平成27~29年度)最終報告書、2018. https://www.n.chiba-u.jp/center/statio/pdf/net/work/report_3.pdf
- 3) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、平成27年度文科省委託事業、看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究 学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発(平成27~29年度)最終報告書、2018.
- 4) 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、平成29年度看護学教育研究共同利用拠点看護学教育ワークショップ報告書 看護学教育の自律的・継続的質改善(CQI)の戦略を練る、2018.